

サイの御教え 一九八三年ラーマナヴァミーの御講話  
神となる定め

宇宙は主の栄光によって照らされている  
宇宙は主の栄光の中に永遠に輝いている  
主の光が射さなくなれば、宇宙は光を放てない  
宇宙とその主なる神は、  
遍く光と愛あまねによって、永遠に結ばれている

愛の化身たちよ！  
善いことを思い、善い言葉を語りなさい  
何をするにも善い行いをしなさい  
これらが見られない時、  
どうしてサイは、あなたを励まし、褒め、  
喜びを与えることなどできましようか？  
決断し、その答えを自らに  
きっぱりと述べなさい

〔テルグ語の詩〕

人を最も喜ばせるのは、思いと言葉と行いにおける甘さです。人のハートに喜びを与えるその神秘的な成分は、純粋なラーマの本質です。「ラーマ」とは「大きな喜びをもたらすもの」という意味です。お腹いっぱい食べ物、十分な眠り、子供たちの笑い声に満ちた家庭——大抵の人にとっては、これらが幸福の最大レベルです。ですが、これは生まれてから死ぬまでの間だけのものにすぎません。生まれる前と死んだ後はどうでしょうか？ 肉体はあなたとは別のものです。あなたは何十年かの間は肉体を所有し、肉体に食べ物を与え、養い、あなたの思い通りに肉体を使えるよう奮闘します。肉体の中の「あなた」あるいは「私」というのは「アートマ」のことであり、それは唯一無二のものであります。自分と肉体との同一感が弱まった時、アートマ（神我）のままゆいばかりの光が放たれるでしょう。

物を溜め込んでも恩寵は得られない

肉体という複合体への執着とは、肉体が必要とするものや強欲を満たしてくれるものを手に入れること、蓄えることを意味します。蓄えることは利己的な搾取を助長します。蓄えることで神の恩寵を得ることはできません。蓄えだすときりがありません。喉の渇きは一飲みする毎に増していきます。渇きは常に、もっともっとと欲しがります。小雨で湖が一杯になりますか？ 唾液が喉の渇きを癒しますか？ 草の葉が石炭のように長く燃えますか？ 物や学識や名声をいくら積み上げても、得たものを自分や他の人たちのために実際に役立てないかぎり、何にもなりません。

人が自分だと信じている肉体はその人が使うことのできる道具にすぎない、ということに気づく英知が芽生えなければなりません。それは、より高い霊的意識への第一歩です。どの人の中にも、常に自由で、常に無執着で、常に純粋なアートマが存在します。それが、表には見えずともすべての人の中に明らかに存在しているブラフマン（絶対実在）、宇宙意識というものです。ヨーガ（神と

の合一)は、世界を見事なまでの無関心をもって眺められた時に喚起されます。それは究極のアーナンダ(神の至福)の源です。

「どうすれば放棄すなわち無執着が喜びを引き起こすことができるのか？」と尋ねるかもしれません。ものごとを行う時、自分がやっているという感覚を捨てなさい。どんな情動、あるいは反応を体験している時でも、自分こそがそれを味わっている者であるという感覚を捨てなさい。そうすれば、つねに歓喜していることができます。そうすれば、ボーギ(享受者)は真のヨーギ(靈的に進化した人)となります。

### 神はすべてのものの土台

人が喜びを得ることのできるものの実体について考えてごらんください！ そのどれもが神の摂理で満ちています。降り注ぐ雨、輝く太陽、涼やかさをもたらす月、流れ行く川は皆、すべての人のためにあります。ですから、それらを自分のもの

だと主張したり、あるいは他の人々がそれらの贈り物を分かち合うのを妨げたりする権利など、誰にもありません。支配する側であれ、される側であれ、神はすべてのものの土台です。神なるアートマすなわちブラフマンの恩寵によって生命原理が働かないかぎり、目はものを見ることができななし、耳は音を聞くことができませぬ。エゴと所意識という枷かせを捨て去った時、人はアートマの真実を知ることができるようになります。

幼い子供にはエゴと所有欲は詰まっています。母親の胸で乳を飲み、新鮮できれいでさわやかな空気を吸い、母親が歌う優しい子守唄にわくわくしています。けれど、成長するにつれ、私のものとあなたのものという二元的な感情を持つようになり、虚栄や所有欲、食欲や憎しみで身動きが取れなくなります。そうして、神性は無視されるようになります。アートマというものは、いわゆる浮き沈みによって影響を受けることはありません。湖の水がさざめくと池の中に映る月もさざめき、波打っているように見えますが、空の上にある月

は湖水に映った自分の姿に起こったことに対して影響を受けることはありません。それと同様に、心は波立ち、動揺しますが、アトマは静かで、煩わされることがありません。

アトマ、すなわち私たちの中にいる神の、もう一つの側面も忘れないようにしなければなりません。アトマは私たちの中に存在するだけでなく、私たちの外にも存在しています。実際、ヴェーダはこう述べています。

アンタル バヒシチャ タットサルヴァム

ヴィヤーピヤ ナーラーヤナツ ステイタハ

(外であろうと、内であろうと、

神は遍く存在している)

自分の顔を見るには、鏡を見るか、顔を映す媒体を見るしかありません。自分の顔に汚れが付いていることがわかれば、それをふき取って顔をきれいにすることができず、一人静かな場所に引きこもることは、きれいな鏡に向かうようなもの

です。騒乱と労苦のただ中にいることは、曇った汚い鏡を覗き込んでいるようなものです。だからこそ、そのような静修（リトリート）は望ましいのです。

人は普遍なる意志から直に生まれた

私たちの内に存在するアトマは、普遍なる神性意識、すなわち、パラマアトマ（超神我／パラマトマ）と同一です。それはサット・チット・アーナンダです。その性質は、在ること・意識・至福であると語られています。ヴェーダ（古代の天啓経典）は、それを「サツティヤムグニヤーナム アナンタム ブランマー」、すなわち、「真理・英知・無限であるブラフマン」と述べています。人はブラフマンから発生したので、ブラフマンの意識と呼ぶことができます。空はブラフマンの顕現である、ヴェーダは宣言しています。風は空から生まれ、火は空気と水の投影であり、地は空と水と火に起因しています。植物は地に育って食

物となり、人を形作ります。ゆえに、人は普遍的な神我の普遍的な意志から直に生まれた、ということなのです。

人には五つの鞄さやがあります。肉体の鞄、生気の鞄、心の鞄、知性の鞄、そして、至福の鞄です。人の核となっているのは至福の鞄です。ですから、人は限りなき至福を求めて自らの内を探求するだけではないのです。至福は、蓄えることによってではなく、他の人々の幸せのためにと自らを犠牲にして努めることによって求めなければなりません。ヴェーダでは、テイヤーガ（犠牲／捨離）が不滅への唯一の道として推奨されています。十分に、喜んで与えなさい。神に感謝し、神の栄光のために与えるのです。

利己心は慈愛を破壊する病原です。自分は一歩間違えて踏み出してしまったと気づいても、利己心がそれに抗あらがうことを許しません。ですが、確固たる決意によってそれに打ち克つことができます。あなたが獲得した知識や技能を他の人々と分かち合いなさい。あなたに恩恵をもたらした考えや理

想、あなたが規律と献身によって勝ち得た喜びを分かち合うのです。分かち合うことで、それが消えてしまったり、その価値が下がったりすることはありません。それどころか、それはさらに素晴らしい輝きを増すことでしよう。

ラーマは内なる神の声

そうした理想の中でも、ラーマは真理（サティヤ／真実）を高く掲げています。あなたを通して語っているのはラーマであり、ラーマだったらそう言うだろうと考えるようにして、一語一語を貴びなさい。決定的に重大な状況においてラーマとの約束どおりに行動しなかったことを、ラクシュマナがどれほど後悔したことか考えてごらんください。ラーマはラクシュマナに決してシーターを庵に一人残してはいけないと頼んでいましたし、ラクシュマナもそれに同意していました。ですが、ラクシュマナはその場を立ち去り、そのせいでラーヴァナはシーターを誘拐して自分の島へと連

れ去ることができたのです！ ラーマはアトマ  
ラーマ、すなわち、内なる神の声です。それに背  
いたり、それを避けたりしてはいけません。いつ  
もその声が自分に警告を与えてくれますようにと  
祈りなさい。謙虚に祈りなさい。そして、その忠  
告に託すのです。そうすれば、ラーマは慈悲深く  
あなたを正しく導いてくれるでしょう。

バドラーチャラムのラームダースは、牢屋に入  
れられ、容赦なく鞭で打たれました。けれど、決  
してラーマへの信仰を失いませんでした。彼は悲  
しげに恩寵を求めて祈りました。そして、神の介  
入によって拷問から救い出されることができたの  
です。揺るぎない信仰は霊的な成熟の証しです。  
それは、自らの内なる実体、揺るぎない核心、す  
なわち、人の中に在る神に気づいたことによつて  
もたらされたものです。

内なる平安と普遍的な愛という理想を実践しな  
さい。無私の愛を十人の人に降り注ぎ、『ラーマー  
ヤナ』のラーマラージャ（ラーマの正義に基づい  
た統治）を再び打ち立てるのです。「ラーマ」とは

「喜ばせる者」という意味です。誰に対しても感  
じよくありなさい。あなたといると楽しいと誰も  
が思えるようにしなさい。決して言葉や行いで傷  
つけたり、危害を加えたりしてはいけません。あ  
なたのハートをきれいにしなさい。あなたのハー  
トから、ちっぽけな利己心を洗い流しなさい。

利己心を持ったまま、

百万本の花を供えて

プージャー（礼拝）をしてごらんなさい

どの花も拒絶され、

一本たりとも受け取られることはないでしょう

一輪の蓮の花を、あなたのハートを、

とても清しいハートを供えなさい

サティヤサイはそれを受け取り、

愛と平安を授けます

あなたの美德を花として供えなさい。美しさと  
芳香を放つ美德を。強欲、怒りや憎しみといった  
害虫の付いていない、蓮の花のようなハートを捧

げるのです。

神性という種子は、人の努力と、たゆまぬ気遣いによって、大切に育てなければなりません。そうして花は咲き、実を結ぶのです。思いと言葉と行動によって他者を傷つけるような欲望を、あなたの心からすべて取り除きなさい。そんな一時の満足を与える行為に耽<sup>ふけ</sup>ること得る報いは、悲惨なものとなるでしょう。そうした行為の一つひとつは、あなたの心に種として植え付けられ、雑草のようにはびこって、あなたの平安と喜びを壊すことでしょう。ですから、油断大敵です。あなたの思いと言葉と行動をきれいにし、神となる定めに向かって進む人として振る舞いなさい。それに成功してゴールにたどり着くよう、私はあなた方を祝福します。

一九八三年四月二十一日

ラーマナヴァミー祭

Sathya Sai Speaks Vol.16 C10